

特別記事 理学部ニュースの過去・現在・未来

広報誌編集委員会

理学部ニュース 40 周年記念事業で創刊からすべての理学部ニュースを電子公開したさいに、理学部図書係にあった紙媒体の冊子を読み返してみた。

1969 年、安田講堂の封鎖解除、東京大学の入学試験の中止など皆が不安に思う状況のときに、久保亮五学部長（当時）は「理学部の中に風を通す一つの助け」となるよう理学部弘報の発刊を決断された。当初は少しでも皆の不安をなくせるよう、月 2 回も発行された。

そのとき編集にあられた福島直先生は、巧遅より拙速を重んじ、理学部内の各委員会の活動状況、各教室・部局での動向、事務連絡、お知らせなど手広く扱うとの方針を立て、広報誌をゼロから作りあげられた。編集委員は当初 1 名であったが、5 巻より 2 名、7 巻より 3 名と増え、10 巻から 5 名体制となった。21 巻からは庶務係長が編集に加わる。2002 年には法人化に備え、岡村定矩研究科長（当時）は広報体制を強化するため広報担当職員を置き、34 巻より編集に加わる。現在、4 名の編集委員（物理・地惑・化学・生科）と情報システムチーム、庶務係、広報室からの 5 名の計 9 名で編集している（表 1）。

発行頻度は、1 巻から 8 巻までは夏休み・冬休みをとりながらもほぼ毎月発行されており、9 巻から 16 巻までは年 6 回、17 巻から 34 巻までは年 4 回の発行であった。26 巻、27 巻、33 巻と年に 1 度しか発行されない年もあったが、35 巻以降は年 6 回ずつ順調に発行されている。

福島 直 (地物)	和田 昭允 (化学)	塩田 徹治 (数学)
小堀 巖 (地理)	清水 忠雄 (物理)	木下清一郎 (動物)
猪木 慶治 (物理)	鈴木 秀夫 (地理)	田隅 三生 (生化)
平川 浩正 (物理)	飯高 茂 (数学)	小平 桂一 (天文)
露木 孝彦 (化学)	尾本 恵一 (人類)	矢崎 紘一 (物理)
松野 太郎 (地物)	田賀井篤平 (鉱物)	佐佐木行美 (化学)
高橋 正征 (植物)	佐藤 勝彦 (物理)	横山 茂之 (生化)
内藤 周弼 (分光セ)	松本 良 (地質)	八杉 貞雄 (動物)
守 隆夫 (動物)	十倉 好紀 (物理)	野本 憲一 (天文)
塩川光一郎 (動物)	井本 英夫 (化学)	堀内 弘之 (鉱物)
江口 徹 (物理)	西田 生郎 (生科)	杉浦 直治 (地物)
佐々木 晶 (地質)	小林 直樹 (情報)	牧島 一夫 (物理)
武田 洋幸 (生科)	柴橋 博資 (天文)	田中健太郎 (化学)
真行寺千佳子 (生科)	米澤 徹 (化学)	小澤 一仁 (地惑)
横山 央明 (地惑)	後藤 敬 (化学)	上田 貴志 (生科)
野崎 久義 (生科)	島田 敏宏 (化学)	

■ 表 1：歴代編集委員。左上から横に着任順。

「東京大学 理学部弘報」	1 巻 1 号～1 巻 6 号
「東京大学 理学部広報」	1 巻 7 号～5 巻 2 号
「東京大学理学部 広報」	5 巻 3 号～7 巻 12 号
「東京大学理学部 廣報」	8 巻 1 号～24 巻 3 号
「東京大学理学系研究科・理学部 廣報」	25 巻 1 号～33 巻 1 号
「東京大学理学系研究科・理学部ニュース」	34 巻 1 号～40 巻 6 号
「東京大学 理学系研究科・理学部ニュース」	41 巻 1 号～現在

■ 表 2：表紙タイトルの変遷

発行部数は、2004 年の時点で 3000 部であったが、2006 年度より理学系研究科・理学部の教職員・学生全員、協力講座の教員・大学院生、マスコミ・出版、科学館、予備校への配付が決まり、5000 部の発行となった。オープンキャンパスや公開講演会などイベントがあるときはさらに発行部数を増やす。2007 年度に学生父兄への配付が決まり、現在の発行部数は 7000 部である。

広報誌の顔である表紙については、創刊時の理学部弘報は B5 判で、表紙はタイトルと目次だけのシンプルなものであった。5 巻 3 号より毛筆の「広報」の題字となり、研究に関連する写真を植物、動物のシリーズで掲載した。8 巻より 33 巻までは柴田雄次名誉教授直筆の「廣報」の題字となり、表紙絵は具留多味酸などの分子、地理学、附属施設、グラフ、天体写真、数学、装置、建物をシリーズで載せている。21 巻から 2 色刷り、27 巻からは A4 判、31 巻よりカラーとなる。34 巻よりページデザイン担当職員を置き、デザインを一新した。37 巻より、オールカラー化し、表紙・本文ともにデザインを大きく変えた。表紙の色で年度の見分けがつくよう「水色」「藤紫」「若緑」「朱鷺色」「檸檬色」と年ごとに色を変え、表紙の写真も附属施設・専攻に関連するもの、「理学の宝物」と変えてきた。2006 年には研究科内の公募により、理学部の「り」と Science の「S」の字を配したロゴが採用され、39 巻より表紙に使われている。41 巻より表紙タイトルのレイアウトをすっきりとさせ、お勧めの読み物のタイトルを表紙に載せることになった。本文も余白を十分にとり、段組を一部変更して 2 段組とするなど読みやすくする工夫を重ねている。表紙タイトルの変遷を表 2 に示す。

記事は、さきに挙げたもののほか、教授会メモ、理学部学生自治会、科研費の採択、理学部長と理職との交渉などが創刊時より掲載されている。その後、博士学位取得者、海外渡航者、人事異動、退官にあたっての送辞、追悼文、レクリエーション、学部長就任・退任あいさつ、表彰、新任のあいさつ、雑感、国際交流関係などの記事が掲載されてきた。1 巻 5 号には

藤田良雄名誉教授 101 歳！

岡村 定矩 (天文学専攻 教授)

本研究科名誉教授で文化功労者の藤田良雄先生が、9月28日に101歳の誕生日を迎えられました。まことにおめでとうございます。

藤田先生は東大闘争の時期に、定年退官の数ヶ月前まで評議員の要職に就かれていました。安田講堂事件の余韻さめやらぬ1969年3月、先生の最終講義に対して「断固粉碎」の声が上がり、天文学科の学生が喧喧譁々の議論をしました。私の先生の思い出の中ではこれがもっとも古いものです。

日本学士院長も務められるなど、わが国の学術を代表する研究者でありながら、藤田先生はたいへん気さくなお人柄です。それに甘えてわれわれは、何かにつけ藤田先生を頼りにしてきました。日本で初めて開催された1997年の国際天文学連合の総会の折には、組織委員会名誉委員長に加え、募金委員長までお願いしてしまいました。



■ 藤田良雄先生。101歳のお祝いのパーティで（内海和彦氏撮影）。

藤田先生はすこぶるお元気な方です。92歳の時に標高4200mにあるすばる望遠鏡で観測されたことは語りぐさとなっています。最近は以前ほど頻繁にお見かけしないと思っていたら、なんと先般の皆既日食を船上から楽しまれている様子をテレビで拝見しました。

101歳を迎えられてもなお矍鑠^{かくしゃく}としておられる藤田先生のお元気なお姿をずっと拝見できるのは、われわれ後輩にとっても大きな喜びです。

このページの藤田名誉教授の退官にあたっての送辞が載っている。藤田先生の蔵書はこのほど天文学専攻に寄贈され、「藤田文庫」の創設が検討されている。この特別記事には、藤田先生の101歳のお誕生日と理学部ニュース40周年を一緒にお祝いするという趣旨がある。8巻では「号外」が出ており、「理学部の将来への希望」という特集を組み、理学部内外の諸方面の方々に理学部の将来に関して意見をいただいている。20巻2号には事務サイドからも理学部建物一箇所集中化を望む記事が掲載された。また20巻2号から5～10行ほどの「理学部研究ニュース」、21巻からは半ページから1ページほどの「研究紹介」が載るようになり、この頃から記事にアカデミックな色彩が現れ始める。

2001年、紙媒体の広報誌はやめてホームページを拡充すべきではないかとの議論が起こる。議論のすえ、紙媒体の広報誌への根強い支持があることから、「魅力的な」広報誌の製作にもう一度チャレンジすることとなった。翌年、小柴昌俊特別栄誉教授のノーベル賞受賞があり特集を組む。34巻3号から「実験生物ものがたり」、34巻4号から「研究室探訪」、35巻4号から「望遠鏡ものがたり」、35巻5号から「化学の未来を考える」、36巻2号から「科学英語を考える」と、次々に新連載がスタートした。その後も37巻より本郷以外の理学部の施設をめぐる「附属施設探訪」が「理学系探訪シリーズ」として

始まり、プレスリリースした研究成果を1ページで紹介する「研究ニュース」が始まるなど発展を続けた。「理学系探訪シリーズ」は38巻では「専攻の魅力を語る」、39巻では「附属施設探訪～本郷編～」と展開していく。38巻より、最先端の科学用語を研究者が解説する「理学のキーワード」が始まり、このコラムは化学同人により単行本化された（理学部ニュース2009年9月号P.3）。39巻より理学部の歴史を再発見する「発掘 理学の宝物」、キャリアパス支援の「理学から羽ばたけ」の連載が始まった。2008年、南部陽一郎先生がノーベル賞を受賞された。理学部ニュースはただちに特別記事を企画して40巻4号の巻頭に掲載し、表紙にもノーベル賞受賞のタイトルを掲載した。2008年と2009年には、科学技術振興機構(JST)が主催するサイエンスアゴラ（科学コミュニケーションの大型イベント）に理学部ニュースを出品し、学内外の専門家により、有益なアドバイスをいただいた。現在も理学系研究科の構成員をはじめ、より多くの人々に読んでもらえる“内容”づくりに力を入れている。

最近、学内広報No.1390に特集「原色『部局広報誌』図鑑」が生まれ、理学部ニュースには2ページが与えられた。そこではビジュアルに表紙で理学部ニュースの歴史をふりかえったが、この記事では文章により詳細にふりかえってみた。

(文責：加藤 千恵)